

とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

事務局（連絡先）〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会

*****天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159

（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 15 号

☆2018年(平成30年)

3月 7日 発行

★2017年の茶の花忌報告

長雨に台風の到来で心配された天気も、この日は抜けるような青空の日となりました。記念館の館長代行（藤雄様が1月に亡くなられたので実質館長です）の佐藤ひろ子様が、昨年と同じ50名くらいの参加ではと予想していた数も80名くらいに上り、墓前礼拝後のプログラムも、1時間半ぐらいに渡ってお話や音楽が有り、充実した内容でした。

礼拝の司式者小林茂牧師は、自然を表現した詩と信仰の詩を取り上げ、その中に示された重吉独特の心を理解することが現代人に必要であると指摘されました。墓地には新しく今年正月に亡くなられた八木藤雄様の墓石が建立されていました。

生家の庭に戻って「重吉を偲ぶ会」が、地元中野屋の経営者である杉浦信男様の司会の下に始まりました。まず重吉の詩集出版に尽力した加藤武彦の甥に当たる加藤正彦様が、開会の辞に続き、8年前の神奈川新聞に投稿された記事と写真について解説されました。その写真は、昭和28年川尻村公民館で開かれた「八木重吉を偲ぶ会」（25回忌）に招かれた吉野秀雄・登美子夫妻が、その翌日重吉の墓を訪れた際に、主催した地元「はぐさ会」のひとが撮った写真です。投稿した小坂（旧姓安西）美代子さんは、この墓参の折り、吉野秀雄が、重吉と登美子夫人のことを思い



重吉の妻なりし今のわが妻よためらはずその墓に手を置け

と詠んだと記述しています。加藤正彦様がこの投稿記事のコピーを参加者に配布して下さい、一同感激しました。

次は、慶応大学ワグネル・ソサイエティー男声合唱団OBの方々が重吉詩を合唱して下さい予定でしたが、団員の都合がつかず、代表者のあいさつとCDでの試聴となりました。続いて茨城キリスト教学園中高の元校長である小澤則男さんが「重吉との出会い」と題して話をして下さいました。重吉の詩を授業中に紹介したり、教室に掲示したりを長年続けてきたことで、重吉の詩に共感した生徒や卒業生が後になって小澤先生に連絡をくれたり、教えてくれた先生に感謝の礼状をももらったりしているとのことでした。

次に町田市民文学館の学芸員である神林由貴子様が、昨年の八木重吉展を終えての報告をして下さいました。文学館としては、訪れたお客は歴代2位の数字で、とても好評だったと言う事、多くの寄せられた感想も、全国からの熱心な愛好者の感激や、地元や近くに住む人がこんな素晴らしい詩人がいたことを認識したことなど、ほとんど好意的なものばかりでした。最後に重吉の家と親戚関係ではないが、同じ姓の詩人八木幹夫様が、「〈素朴な琴〉が生まれるまで」と題し、深い解説をして下さいました。西欧の論理的なことばと感覚的に捉えて表現する日本の言葉が融合したような重吉の言葉の魅力を取り上げ、自然をとらえる澄んだ目について指摘され、まさにその通りだと思いました。

★いのちのことば社から重吉関係の本、冊子、トラクトが出版される



昨年11月25日、いのちのことば社から『フォレストブックス』シリーズとして『重吉と旅する』が刊行されました。8月に宮田真実子さんが取材に来られて出版を予告していた本です。クリスチャンでない人にも気軽に読んでもらえるような書籍を目指しての本ですので、親しみやすいイラストも入り、四六変型判の手に取りやすい大きさになっています。全国のキリスト教書店で販売しています。



また出版事業部刊行の書籍紹介冊子『いのちのことば』2月号で、『重吉と旅する』の紹介に加え、特集で「魂の詩人—八木重吉の世界」として、愛好会事務局天利武人牧師の文章が掲載されましたので、以下に紹介します。

.....

「八木重吉の詩」と私 第一宣教バプテスト教会牧師（愛好会事務局） 天利武人

(1) 私の自省の詩

私をはじめて八木重吉の詩に出会ったのは、高校生の時、母が薦めてくれた『八木重吉詩集』だった。私の父は牧師で、母は青森から出て来て婦人伝道師となって父と結婚した。詩集を読むことに抵抗はなく、自然だった。最初に目にとまった詩は、「しのだけ」という詩だった。

この しのだけ／ほそく のびた／なぜ ほそい／ほそいから わたしのむねが 痛い
『秋の瞳』

この短い詩の中に、人の痛みを思いやる優しさと、自らの病に苦しむ思いとが折り重なっていて、その研ぎ澄まされた深い感性に驚かされた。孟宗竹と違ってしの竹は細く、庭の片隅の藪から細く伸びている。役に立たないしの竹を見て、彼の心が痛むのである。ほかにもこういう詩がある。

零

わが／好む 数！？／数 あらじ！？／云えとや！？／『零！』……／
されど、『零』は／数にては、あらじとや！？

詩稿「夾竹桃」大正12年

ねがひ

きれいな気持ちでみよう／花のような気持ちでみよう／
報いをもとめまい／いちばんうつくしくなってみよう

「信仰詩篇」大正15年2月27日

役に立たないような「しの竹」、「零」という数、量ではない「報い」を求めない心とは何を意味しているのだろうか。〈うつくしいもの〉は数、量（業績）ではない「零」である。「報い」を求めない愛という犠牲であり、無心であると私は思う。地位や名誉や金銭的な欲求の誘惑に会うとき、私に自省の念を抱かせる詩だ。八木重吉の詩は、私の牧師生涯における貴重な助言者であり続けている。

(2) 詩碑建立の詩

重吉は1925年3月、東葛飾中学校（千葉県柏市にある現東葛飾高等学校）の英語教師として兵庫県御影から赴任してきた。私自身、1964年の卒業生だ。重吉はそこから眺める自然界や、家族の事や、教室でのことなど3千篇の詩を書いている。彼の創作活動の最盛期だ。

私は多くの人に八木重吉の詩に興味をもってもらいたいと詩碑建立実行委員会事務局長として奔走し、多くのかたがたから寄付を集め、1985年東葛飾高等学校前、国道6号線沿いに詩碑を建立した。建立詩碑は

原っぱ

ずるぶん／ひろい 原っぱだ／いっぽんのみちを／むしやうに あるいてゆくと／
こころが／うつくしくなると／ひとりごとをいふのがうれしくなる

『文章倶楽部』大正14年9月

無性に歩いて行く一途さと、病を負っている身でありながら情熱を傾けて詩業を続けて道程が、また心の美しさを追い求め、喜びにあふれる充実した日々がこの詩の中に現れている。当時、八木重吉の住む職員住宅のまわりは野原が広がっていた。

(3) 死に直面した苦しみと悩みの時の詩

2006年12月4日、私は「B群溶連菌による劇症型壊死性筋膜炎」と診断された。左肩に激しい痛みを覚え、

左足が腿まで紫色に膨れあがり病院に行ったが、「単なる筋肉痛でしょう」とギブスをつけて帰らされた。翌日6時間もいろいろな科で見てもらい皮膚科でやっと病名が分かったときは意識が朦朧となっていた。医師から「切断しなければ命が助からない」と言われ、左足股関節から離断した。当時この手術の生存確率は20%と言われた。約10日間意識不明で、その間恐ろしい幻を見た。浸出液はベッドのシーツを一日に何度も取り替えるほどだった。耐えられないほどの痛みがあった。この間、私の心を癒してくれたのが聖書と八木重吉の詩だった。

いきどおりながらも

いきどおりながらも／美しいわたしであらうよ／

泣きながら／泣きながら／美しいわたしであらうよ

詩稿「美しき世界」大正14年8月24日編

重吉の詩が多くの日を読まれているのは、平易な言葉を用い純粋で素朴な、しかも鋭さを秘めた詩だからだ。さらに、人が経験する苦しみ、痛み、悲しみ、それらが彼の詩と共鳴し、そして神の言葉である福音のメッセージが体験詩として心に入り、勇気と希望を与えてくれるからだ。もしその一冊の詩を読み続けるならば、その詩の魅力に惹かれることだろう。

仕事

信ずること／キリストの名を呼ぶこと／人をゆるし 出来るかぎり愛すること／

それを私の一番よい仕事としたい

「ノートA」

草に すわる

わたしの まちが이었다／わたしのまちが이었다／こうして草にすわれば それがわかる

『秋の瞳』

自らを悔い、痛みを耐え、片足でも仕事に復帰できた恵みを感謝しつつ、これからも聖書のことばと重吉の詩を伝え続けていきたい。

「ああ、私の味わった苦い苦しきは平安のためでした。あなたは私のたましいを慕い、滅びの穴から引き離されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。」

イザヤ書38：17（ユダの王、ヒゼキヤの祈り）



いのちのことば社の宮田さんは、何回も柏と天利牧師の教会を訪れるなかで、『フォレストブック』よりさらに気軽に、あるいはもっと安価な方法で八木重吉とその詩の魅力伝える方法はないかと話し合っているときに、トラクトはどうかと提案されていましたが、宮田さんは早速それを実行に移してくださいました。八木重吉とその詩の魅力を伝えることを中心にしながら、重吉の人生求道の詩の源泉にある聖書の言葉も入れ、気軽に八木重吉を紹介できるものにしてあります。

詩集を買って読むという前段階の案内として有効活用できます。キリスト教出版社ですから、当然聖書の言葉は入りますが、全体としては、キリスト教PRというより、八木重吉の紹介になっていますので、八木重吉愛好者なら、気軽な案内として利用できます。

★ その他の八木重吉関係書籍より紹介

昨年の夏、いのちのことば社と同日に、柏に取材に来られたキリスト新聞社からは、写真付きの詩集『八木重吉詩撰集 祈りのみち』が2015年の9月7日に出版されています。



また地元の郷土史家、手塚直樹さんは、町田ゆかりの随想を2014年1月に『今 まちだの郷』、2018年1月に『郷を愉しむ』と題して刊行し、八木重吉の生家を訪れた体験や茶の花忌に参加した体験を、地元を愛する視点から記述しています。地元の愛好者たちが記念館を愛して支えていてくれることが理想的な姿ですので、とてもうれしく思います。



★CGNTV「本の旅」で八木重吉の紹介が2週にわたって放映される。

キリスト教の福音放送番組CGNTVがいのちのことは社発行の『重吉と旅する』を取り上げ、1月19日と26日の2週にわたって放映しました。19日は、町田市民文学館学芸員で一昨年「八木重吉—さいわいの詩人一展」を企画した神林由貴子さんにインタビューして、八木重吉の詩の魅力と町田ゆかりの詩人として保存し伝えて行きたいという思いが語られていました。26日は、いのちのことは社『フォレストブック』編集事務局の宮田真実子さんと天利牧師にインタビューするというので、天利牧師の教会を会場に収録が行われました。昨年没後90年、今年生誕120年を迎えた八木重吉を特集して本の出版を考えていた宮田さんの思いや、若いころから重吉の詩を愛好し、詩碑を建立し、愛好会の活動が続けて来て、10年前に左足を離断する大変な病気に陥りながら聖書と重吉の詩に励まされて生き抜いて来ている天利武人牧師の、重吉の詩に対する深い思いが語られていました。



1月19日放映（町田市民文学館で収録）



1月26日放映（柏の第一宣教バプテスト教会で収録）

★NHK ラジオ第二放送でも重吉が取り上げられる。

「カルチャーラジオ 文学の世界」のシリーズ番組で、「詩と出会う、詩と生きる」というテーマで批評家・随筆家の若松英輔氏がいろいろな詩人を取り上げて解説する中で、2月15日（再放送22日）「心を見つめる詩～八木重吉が届けた声」と題して語っていました。すぐれた4行詩である〈素朴な琴〉の言葉は、〈私〉がどうこうではなく、耳に聞こえない神あるいは大自然の生命の風を全身で受け止めている言葉であり、深い求道をしていた重吉だからこそ表現できたのであって、平易な言葉でもだれも真似することはできないと分析するなど、他の詩も挙げて重吉の詩が〈心〉を見つめた詩であることを強調していました。

★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

このテーマでの皆さんからの原稿、第4集に向けて作成を目指しています。どうぞ奮ってお寄せ下さい。

（募集） 題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」（この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。）

字数：2000字程度（原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎）

締切：なし（随時お送りください）

送り先：メール（kmat27aiko@gmail.com）か、郵送 〒270-1406 千葉県白井市中205 小林正継 へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> （作成途中の部分があることをご了解下さい）

Eメールアドレス kmat27aiko@gmail.com （管理者小林正継）

+++++

*今回は寄稿して下さった文章や詩がありますので、別紙（表裏2名）で同封しておきました。

詩篇「素朴な琴」が生れるまで ー自然をとらえる澄んだ目ー

八木幹夫

今まで重吉さんの詩についてはあちこちで喋ったり書いたりしてきましたが、今日は短い時間ですが、重吉さんの自然観についてお話をしてみようと思います。はじめにこの大戸の重吉さんの生誕地にある詩碑「素朴な琴」に触れたいと思います。この詩は余りにも有名な詩なので、つい当然のように日本人である私たちはこの自然観を自明のこととして受け入れています。この作品は千葉県県の東葛飾中学校の教員住宅に在る頃に生まれた詩だろうと思います。この地域は重吉さんもお気に入りの森や林の多い場所で、しばしば子供たちとも散歩したといひます。

この明るさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しくさに耐えかね
琴はしづかに鳴りいだすだらう
『貧しき信徒』

この四行詩は日本語の文脈としては少しもおかしなところはありませんね。しかし、ちょっと意地悪くこの作品を英語文脈的な手法で解釈すると不思議なことに気がきます。新聞の記事を書く時には「なぜ、いつ、何を、どこで、誰が、どのように」という5W1Hを基本にするという鉄則があります。そこでこの詩を読んでみます。素朴な琴とはどんな琴なのか。(人によってはこの琴は西洋のハーブだともいひますが。) 琴を置くのは誰なのか。人間なのか、神様なのか。それをどこへ置くのか。森の陽当りのいい場所なのか。この明るさとはどんな明るさなのか。秋の美しさとは具体的にどんな美しさなのか。紅葉した森の木の葉の色、周辺の空気の爽やかさ。琴はなぜ秋の美しさに耐えかねるのか。無生物なのにどうして耐えるという人間的な表現にされているのか。琴を弾いているのは風なのか。琴自らが自然に鳴りだすのか。自ら琴が鳴りいだすとは神様の手が触れるということなのか。それとも、素朴な琴は重吉さん自身を表す暗喩なのだろうか。神様が木漏れ日の射す森にそっと琴(重吉)を置く。するとその森の木々の紅葉の美しさに耐えかねて琴が美しいメロディを奏でる。そう考えてもいいのかもしれない。考えてみると実は疑問だらけの詩篇ではないかという気になります。重吉さんがこうした日本語による口語自由詩を生み出す根本にあったものは、英語文脈を通過したからだと私は考えています。

昔、私は英語文法を習った時にその構造の論理性に非常に驚いた経験があります。反対に日本語のもつアンビグイティー(曖昧さ)にも気がきました。日本語は人称もまた明確にしない言語なんですね。私であるか貴方であるか、それとも三人称の彼か彼女か、主体を明確にしないところがあるのです。単数形か複数形かも同様です。口語的な表現でも、そうですね。最近の日本語は変わってきたと云いますが、それでもこの曖昧表現は現在でもさほど変わってはいません。重吉さんは東京師範学校でも英語に堪能な方でした。友人には後に西脇順三郎とも親交のあった英文学者の福原麟太郎のような方もおひます。重吉さんはイギリスのロマン派詩人ジョン・キーツの「秋に寄す」等の詩が好きで、自分でも一時期翻訳を試みています。ここの記念館にも英文のキーツのエンディミオン(詩篇)に言及したものがあります。そうした背景を考えると当然英語の文脈を分かっている方です。しかしこの「素朴な琴」には翻訳語臭さが微塵も感じられません。まず「明るさ」という具体的であり、抽象的な表現は日本の風土と切り離すことができません。日本人は昔から「秋」の気配を度々詩にしてきました。

「秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」(藤原敏行)

この和歌などはその典型です。目にははっきりとは見えないけれど風の音、おとずれに気配を感じるのですね。「秋の美しさ」といえば、人々は経験的に野山の紅葉の変化や澄んだ空気、空の高さ、そうしたものを共通項と

して一気に受け止める感性が日本人には出来あがっているんです。それを前提として重吉さんは「この明るさ」と言い切ったのです。

さらになぜ琴が鳴り出すのか。ここでは琴が擬人化されているわけです。琴という楽器が「秋の美しさ」に身を震わせるようにして鳴りはじめるといいます。ここには日本文化が育んできた自然観の伝統があります。最近「秋の美しさ」がずいぶん変化してしまいました。夏から秋。秋から冬。そういうゆったりとした時間の変化が消えて、夏からいきなり冬がやってきたようなそんな異常気象です。重吉さんの歌った季節の美しさが詩の中にしか残らなくなってしまいそうです。この詩がかかれた詩集「貧しき信徒」は彼の死後発表されたものですが、彼自身も死を覚悟（詩篇「踊」参照）していただけに、いっそう美しい光をはなっています。当時（一九二五年大正一四年）彼は千葉県の県立東葛飾中学校に赴任。その年、加藤武雄の尽力によって『秋の瞳』（生前唯一の詩集）が刊行され、少しずつではありますが新聞雑誌等に寄稿を求められるようになる。重吉さんが「素朴な琴」の詩にたどりつくまでには次のような詩があったことも知っておいてほしいと思います。同じ詩集の『貧しき信徒』から。

障子

あかるい秋がやってきた／しづかな障子のそばへすりよって／
おとなしい子供のように／じっとあたりのけはひをたのしんでゐたい

桐の木

桐の木がすきか／わたしはすきだ／桐の木んどこへいこうか

木

はっきりと／もう秋だなおもふころは／色々なものが好きになってくる／
あかるい日なぞ／大きな木のそばへ行ってみたいきがる

踊

冬になって／こんな静かな日はめったにない／桃子をつれて出たらば／櫟林のはづれで／
子供はひとりでに踊りはじめた／両手をくくれた顎のあたりでまわしながら／
毛糸の真紅の頭巾をかぶって首をかしげ／しきりにひょこんひょこんやってみる／
ふくらんで着こんだ着物に染めてある／鳳凰の赤い模様があかるい／
きつく死をみつめた私のころは／桃子がおどるのを見てうれしかった

（八木重吉全詩集2 詩集「貧しき信徒・詩稿」 ちくま文庫）

文庫の解説で田中清光氏はこんなことを述べています。「彼の自然観は、人間以外の自然物を人間に奉仕するものとしたキリスト教社会の観念や、自然界を旧約的な宇宙観で把握するといったものではなかった。聖書に学びつつも、無邪気なまでに自然を求めそのなかに息づく人格的な神を呼び続けたその所作は、わが国の精神風土に根ざした求道者の系列にも結ばれる要素を含んでいたといえる。」もうすこし分かりやすい言い方をすれば、重吉さんは木にも、石にも、川にも、空にも、虫にも、魚や動物にも神々が宿ると考えていたところがあるのです。それは日本人が昔から土俗的な信仰の中で大切にしてきた宗教観ともいえるでしょう。道元禪師は自然の摂理を和歌に託して「春ははな夏ほととぎす秋はつき冬ゆき冴えてすずしかりけり」といいました。これは春夏秋冬、人もまた自然のながれにさからわず季節の巡るままに生きることを佳しとする覚悟を示したものですが、晩年の重吉さんはどこかそうした自然観を獲得したように思います。「素朴な琴」はこうした自然観のもとで生まれたように思います。私の理屈っぽい説明を拒むかのようにこの詩はすっきりとここに立っています。これが詩の力なのです。これで私のお話を終わります。

★田中敏弘氏の詩紹介 (三田市の愛好者田中さんの八木重吉に対する思いを詩にした1篇です。)

心の内なる重吉

眼を閉じれば
心に残る
詩が聞こえてくる
八木重吉の詩

前にも書いた
ことがある
重吉への私の
呼びかけ

「花がふってくるとおもふ
花がふってくるとおもふ」

この詩が今では
一番心に残る
詩の一つ

わたしは重吉とその詩を
知ってから

「八木重吉全集」を
もとめいつも手元に
置き読んできた

時に何やら忙しすぎて
疲れ切ったときなど
重吉詩はわたしを必ず
慰めてくれる

想えば詩人重吉を
知ってからわたしは
重吉詩に心惹かれ
何かと書き留めてきた
教会で所謂「証し」として
重吉とその詩について」を
幾度か話しても来た

兵庫現代詩協会の
集まりでも重吉と
その詩について

話すように言われ
「八木重吉とその詩境」
と題し話すことも
あった

その度に想うことは
わたしのこころの内なる
重吉は絶えずわたしを
いつも見守って
くれている

この詩の掛軸を
床の間にかけて以来
もう何年たったこと
だろうか
これを見る度に
あの若かりし
重吉の面影が
しのばれる

戦後の若いとき
初めて重吉詩に
出会ったときの
あの感動を今想う
それがわたしの
「詩集 重吉よ一里山の
パストラルー」となった

重吉の詩には
心惹かれる詩が
数々あり
今日はどの詩を
もう一度読み
口ずさむかは
その日により
変わってゆく

「花がふってくるとおもふ・・・」
という詩をわたしの
敬愛する書家の方に

書いていただいた

ある時はわたしの
心の内なる重吉は
いつでも淋しい顔つき
で笑ってわたしを
見ている

谷川へ釣りに行けば
ハヤを釣った重吉が
おおきな石の上に
座ってこちらを
じっと見て笑っている
わたしが大きな
ドイツ鯉を珍しく
釣り上げた時など
重吉の驚くような
嬉しい顔を見せた
ように思えたことも
あった
眼を閉じても
閉じなくても
重吉はそこにいる
あるときは書齋を訪れ
「詩集がずいぶん
増えましたね」と言って
笑っている

わたしは川釣りが好きで
出かけてゆけば
重吉は早や先回りし
川辺に立つわたしを
見ている

釣り糸を川上に流し
流れてゆく方を
見やればやはり
重吉の面影が
じっとわたしを
覗きこんでいる

「八木重吉全集」を
買い求め書齋の
書棚の目立ちやすくすぐ手に取れる
ところに置いた

私は前にも
幾度か重吉について
書き、また重吉詩を
知らない人たちにも
紹介してきた

私の属している
キリスト教会でも
私の詩を読んで
くださる人たちは
重吉詩を読むように
なられた人も
増えたよう

重吉は何時まで経っても
敬愛する詩人
いつ読んでも
わたしを慰め
励ましてくれる詩人
重吉がそこにいる

ああ重吉が今この世に
いればどんな詩を
残してくれることか
どんなにわたしたちを
慰め励ましてくれる
ことだろうか

床の間の掛け軸を
見る度にわたしは
いつも生きる力を
もらい生きた詩が
書けるようにと願う